

隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第15回

森の彫刻家 上床利秋

この世で最も貴きもの

モニュメント制作が依頼者との間で合意すると、まず私は設置現場をこの目で確かめることにしている。建物の壁に「思いやる心」を園児たちに視覚的に教育する環境を整えるということで、長島町の「認定こども園さすえ」の新園舎を見に行った。

園からの帰り道に、私はオスカーワイルド著「幸福の王子」を思い出していた。ある翻訳者が、もし一人の人間が生涯でたった一冊しか本を読まなくなったら、私だったら「幸福の王子」を読むと紹介されている物語。すでに読者も子供のころ童話を読まれて、悲しいお話として思い出される方も多しはず。

物語の終末では、ごみ箱にうち捨てられていた銅像王子の鉛の心臓と燕の死骸を天使が天国に持ち帰ることになっている。ここで博愛と自己犠牲を、この世で最も貴きものとして感動的に取り扱っていた。私は園の教育目標に掲げている、「思いやる心」を感じさせるものとして、この「幸福の王子」の物語彫刻を私なりに創ってみようと考えた。

「幸福の王子」という物語を書くために原作者は、王子様の銅像は金箔や宝石の嵌め込まれた煌びやかな像にして、世間の言う「美しいもの」として描いた。そしてあるはずのない鉛の心臓までつけた。こうすることで物語と

して発展するわけだから、まあ良しとしよう。だいたい、銅像が生きていて燕と会話が出来なきゃ、それこそ話にならないのだから。

しかしながら私としては（彫刻家として、また幼児教育大学教授として）やはりこだわりが残ってしまう。物語そのものは好きなだけけれども、ここでいう民衆の口にする彫刻の美は美ではない。むしろ愚の骨頂なのだ。愚の骨頂のシンボルにされた王子が自分の想いを燕に託し、その姿は真の美へと変貌を遂げていく。しかし衆愚はそれを理解できずに錆びついてしまった。物語を進めるためにそうしなかったのだろうが、現実はそのままで人間はバカではないと思っている。何よりも、童話を読む子供たちが、美の概念を勘違いされて教育されはしないかと心配するのである。

私は、新園舎のエントランスを飾る壁には打ち捨てられた王子の鉛の心臓と燕を、そして金箔宝石は無くても魅力的な王子の立像の二つを、ブロンズレリーフとして制作してみたいと正覚智成園長先生に制作アイデアを話し、ご理解していただいた。モニュメントの意味するものが、きつと清らかな子供たちの心に刻まれて後世にまで、きちんと伝わっていくものと信じている。

製作の流れ



アイディアスケッチ①
涙を流す王子と燕の出会いの場面から。



アイディアスケッチ②
王子の願いに聴き入る燕の場面に変更。より、優美な衣裳に。



粘土による粗づけ
マントの長さや背景のレイアウトに時間を注いだ。



粘土原型完成
現在、ブロンズに鑄造中。王子の肩に留まる燕には金箔をくわえさせる予定。